

一 はじめに

◆なぜ日本人は「こんぎつね」に郷愁を感じるのか？

◆作家はふるさとの風土を背負っている

○宮沢賢治

「水仙月の四日」

そんなはげしい風や雪の声の間からすきとおるような泣声がちらつとまた聞えてきました。雪童子はまっすぐにそっちへかけて行きました。雪婆んこのふりみだした髪が、その顔に気みわるくさわりました。峠の雪の中に、赤い毛布(けつと)をかぶったさっきの子が、風にかこまれて、もう足を雪から抜けなくなってよろよろ倒れ、雪に手をつけて、起きあがるうとして泣いていたのです。

「毛布をかぶって、うつ向けになっておいで。毛布をかぶって、うつむけになっておいで。ひゆう。」雪童子は走りながら叫びました。けれどもそれは子どもにはただ風の声ときこえ、そのかたちは眼に見えなかったのです。

○金子みすゞ

「大漁」

朝焼小焼だ／大漁だ。／大羽鰹の／大漁だ。
浜はまつりの／ようだけど／海のなかでは／何万の
鰹のとむらい／するだろう。

「鯨法会」

鯨法会は春のくれ、／海に飛魚採れるころ。
浜のお寺で鳴る鐘が、／ゆれて水面をわたるとき、
村の漁師が羽織着て、／浜のお寺へいそぐとき、
沖で鯨の子がひとり、／その鳴る鐘をききながら、
死んだ父さま、母さまを、／こいし、こいしと泣いてます。
海のおもてを、鐘の音は、／海のどこまで、ひびくやら。

「島」 B 新美南吉

島で、或あさ、／鯨がとれた。

どこの家でも、／鯨を食べた。
鬚は、呻りに、／売られていった。
りらら、鯨油は、／ランプで燃えた。
鯨の話が、／どこでもされた。
島は、小さな、／まずしい村だ。

◆南吉作品は里山の文学

○「ごんごろ鐘」（昭和17年3月作）

最後に吉彦さんがじぶんで、大きく大きく撞木を振って、がオオん、とついた。わんわんわん、と長く余韻がつづいた。すると吉彦さんが、

「西の谷も東の谷も、北の谷も南の谷も鳴るぞや。ほれ、あそこの村も、あそこの村も、鳴るぞや。」

と謎のようなことをいった。

○「谷合」（昭和5年4月作）

たんたん谷合／田が一つ。／蛙がグツグツ／なっている。

たんたん谷合／木が一つ。／狐がうろうろ／めぐってる。

たんたん谷合／星一つ。／水田の中に／うつってる。

たんたん谷合／田が一つ。／蛙がフイと／なきやんだ。

・典型的な知多半島の里山環境としての谷戸（やと）を構成する田・川・溜池・森

※谷戸は主に関東で使われる呼称。南吉は「狐」に谷地と書いている。

二 川

◆作品に描かれた川

○「ごん狐」（「権狐」昭和6年10月作）

或秋のことでした。二、三日雨がふりつづいたその間、ごんは、外へも出られなくて穴の中にしゃがんでいました。

雨があがると、ごんは、ほっとして穴からはい出ました。空はからっと晴れていて、百舌鳥の声がきんきん、ひびいていました。

ごんは、村の小川の堤まで出て来ました。あたりの、すすきの穂には、まだ雨のしずくが光っていました。川は、いつもは水が少ないのですが、三日もの雨で、水が、どつとましてしまいました。ただのときは水につかることのない、川べりのすすきや、萩の株が、黄いろくにこった水に横だおしになって、もまれていきます。ごんは川下の方へと、ぬかるみみちを歩いていきました。

ふと見ると、川の中に人がいて、何かやっています。ごんは、見つからないように、そうっと草の深いところへ歩きよって、そこからじつとのぞいてみました。

「兵十だな」と、ごんは思いました。兵十はぼろぼろの黒いきものをまくし上げて、腰のところまで水にひたりながら、魚をとる、はりきりという、網をゆすぶっていました。はちまきをした顔の横つちように、まるい萩の葉が一まい、大きな黒子みたいへばりついていました。

しばらくすると、兵十は、はりきり網の一ばんうしろの、袋のようになったところを、水の中からもちあげました。その中には、芝の根や、草の葉や、くさった木ぎれなどが、ごちやごちやはいっていました。でもところどころ、白いものがきらきら光っています。それは、ふというなぎの腹や、大きなきすの腹でした。兵十は、びくの中へ、そのうなぎやきすを、ごみと一しよにぶちこみました。そして、また、袋の口をしばって、水の中へ入れました。

・村の小川Ⅱ背戸川Ⅱ矢勝川

・はりきり網

・川なのにキス？

○「屁」（昭和15年4月作）

何処かへ稼ぎに出ているお父つあんが、時々帰って来る。おつ母は早く死んでしまっていない。石太郎はポンツク（川漁）にばかり行く。捕って来た鮒や鱈を爺さんに喰べさせる。又買いにゆけば鱈や鰻を売ってくれるということである。

石太郎の着物はいつ洗ったとも知れず、垢で真黒になっている。その着物に、家の中のあの貧乏の匂いや、ポンツクの生臭い匂いをつけて学校へやって来る……

○「川」A（昭和10年9月作・推定）

「伸ちゃあ」と蓮造が彼の知っている限りの技巧で一通りの快樂をためすように味ってしまった時、土堤の上で、寂しそうにしている伸に向って呼び掛けた。「伸ちゃもはいれや、面白えぞ、これ見よ、どぶうん。」そして彼は家鴨が水の中へ首を突っ込むときのように丸い尻を虚空に向け、潜って見せた。（略）

「ほんとはいれや伸ちゃ」と坂市も声を添えて誘った。「いくらでも泳げるぞ。一ぺん水をのむと後は楽々だ。俺でもな始め怖かったけど、一ぺんぶくぶくこいたら（溺れたら）こんだ泳げるようになったぞ。」

◆写真 石杖（いしいる）で泳ぐ岩滑の子どもたち

◆悪水との戦い

・悪水をめぐる半田町岩滑と阿久比村植の確執

・明治44年 後田事件

三 溜池

◆多様な生物が暮らす知多半島を代表するヒオトープ（生物生息空間）

・コウホネ・ガガブタ（水草）、トンボ・ゲンゴロウ（昆虫）、カエル・イモリ（両生類）、カメ（爬虫類）、コイ・フナ（魚類）、カモ・カイツブリ（水鳥） etc

○「一年生たちとひよめ」（第一次稿「ウソ」昭和10年5月作）

学校へいくとちゆうに、大きな池がありました。一年生たちが、朝そこを通りかかりました。池の中にはひよめが五六つば、黒くうかんでおりました。それをみると一年生たちは、いつものように声をそろえて、

ひよめ、／＼ひよめ、

だんごやアるに／＼ウぐウれツ、
とうたいました。

するとひよめは頭からふくりと水のなかにもぐりました。だんごがもらえるのをよるこんでいるようにみえました。けれど一年生たちは、ひよめにだんごをやりませんでした。学校へゆくのにだんごなどもっている子はありません。

一年生たちは、それから学校にきました。

学校では先生が教えました。

「みなさん、うそをついてはなりません。うそをつくのはたいへんわるいことです。むかしの人は、うそをつくと死んでから赤鬼に、舌べろを釘ぬきでひっこぬかれるといったものです……」

◆知多半島は日本有数の溜池密集地域

・知多半島各村の村絵図に描かれた雨池（溜池）の数は一〇〇二か所

※青木美智男「近世知多半島の「雨池」と村落景観」『知多半島の歴史と現在』No.7）

・岩滑村……山ノ田池（山田池）・山ノ田下池・乙川新田雨池（桶戸池）・東午ヶ池・西午ヶ池・井堀池・折戸池・折戸上池・広脇池・中ノ池・半田新田雨池（半田池）

◆作品に描かれた溜池

○「おじいさんのランプ」（昭和17年4月作）

道が西の峠にさしかかるあたりに、半田池という大きな池がある。春のことではいたたえた水が、月の下で銀盤のようにけぶり光っていた。池の岸にはほんの木や柳が、水の中のをぞくようなかっこうで立っていた。

・半田池……元禄八年（一六九五）に開かれた山方新田（半田村）に水を供給するために造られた。

・黒鋏街道……知多半島の溜池造成に腕をふるった黒鋏衆が出稼ぎのために通った道

○「嘘」(昭和16年6月作)

午ヶ池の南の山の中に深くえぐれた谷間がある…… 兵太郎君は、昨日午ヶ池へ釣にいったついでに、例のところまで行って試してみたのである。

・午ヶ池……元文三(一七三八)年に開かれた多門新田(通称「シンタノムネ」)に水を供給するために造られた。

○「草」(昭和17年5月作)

敵というのは、山を越えた向うの村の子供達のことです。向うの村の子供達は、夏休みになってから毎日大池に来て、こちらの村の子供達と水あび場をうばいあうのでした。

・大池(山田池)……現在は埋め立てられ、半田農業高校の実習田。

○「疣」(昭和18年1月作)

絹池は大きいというほどの池ではありませんが、底知れず深いのと、水が澄んでいて冷いのと、村から遠いので、村の子供達も遊びにいかない池でした。三人はその池を盥にすがって、南から北へ横切ろうというのでした。三人は南の堤防にたどりついて見ますと、東、北、西の三方を山でかこまれた池は、それらの山とまっ白な雲をうかべているばかりで、あたりには人のけはいがまるでありません。三人はもう、すこしづきみにかんじました。しかしせっかく、ここまで盥をかついで来て水にはいりもせず帰っては、あまり意気地のないはなしではありませんか。三人は勇気を出して裸になりました。そして土堤の下の葦の中へ、おそろおそろ盥をおろしてやりました。盥がばちゃんといいました。その音があたりの山一めん聞こえたらうと思われほど、大きな音に聞こえました。盥のところから波の輪がひろがっていきました。見てみると、池のいちばん向うのはしまで、ひろがって行って、その小松の影がゆらりゆらりとゆれました。」

・絹池……実在しない架空の池。モデルは西狐谷池か。

◆民話と溜池

○「大福寺の狐」(中山文夫著『私の南吉覚書』より)

大興寺は一色範氏の建立といわれている。即ち創建の時代は足利時代の初めという事になる。その大興寺より更に古い寺が、村東の山裾にあった。寺名は大福寺という。或年、突然山崩れが起きて池が出来、寺は一瞬に水底に沈んだ。場所は今のカネツケデンという池の辺りである。今でも、夕暮れ周囲の松林に風が吹くころ、決まって池底から、鐘音がゴーンゴーンと聞こえてくる。寺に住みついた狐が鳴らすのだという。

・南吉は中山文夫の母しゑからしゑの実家がある富貴(武豊町)や長年暮らした大興寺(知多市)の民話を数多く聴いている。民話には池にまつわるものも多い。

四 森

◆温暖な知多半島は本来(人が手を加えなければ)常緑広葉樹林で覆われる土地

○ごんの巢穴の周りの植生
『赤い鳥』の「ごん狐」

その中山から、少しはなれた山の中に、「ごん狐」と言う狐がいました。ごんは、一人ぼっちの小狐で、しだの一ぱいしげった森の中に穴をほって住んでいました。

・スパルタノートの「権狐」

その頃、中山から少し離れた山の中に、権狐と云う狐がいました。権狐は、一人ぼっちの小さな狐で、いささぎの一ぱい繁った所に、洞を作って、その中に住んでいました。

◆人の利用により姿を変える森

- ・製塩や窯業など木材燃料を大量に用いる産業により、原生林はほとんど伐採された。
- ・しかし、降雨の多い日本では、かなり大胆に伐採しても比較的早く回復する。
- ・伐採後は、強い太陽光を好むアカマツやコナラなどが生える。このように人間の手で植生が変えられた林を「二次林」という。
- ・近年、知多半島でも耕作放棄地が二次林化している例が多く見られる。
- ・「二次林」を放置すれば、やがて下からヒサカキ、カクレミノなど日陰でも育つ木々が生えてきて、本来の「常緑広葉樹林」へと〈遷移〉していく。
- ・しかし、新美南吉の時代（高度成長期以前）は、そうはならないことが多かった。むしろ、マツ林やはげ山が多かった。

○「狐」（昭和18年1月作）

「鴉根って、西の方？」

「成岩から西南の方の山だよ」

「深い山？」

「松の木の生えているところだよ」

○写真 はげ山とマツ林が広がる杉治商会鴉根山畜禽研究所

○写真 岩滑小学校周辺のはげ山

○「マツノ スキナ オヂイサンノ ハナシ」（昭和5年8月作）

キヘイイサンハ ナニヨリ マツノ キノ スキナ オヂイサンダ、マイニチ、アチラ
ノ ソラヤ コチラノ ソラニ タカク ミエル マツバカリ ミテ 杵タ、コトニ
キヘイイイサンハ ムラノ マンナカノ オイシヤサントコノ タカイ マツガ スキ
ダツタ、オレガ コドモノ トキカラ アノ マツハ オレト ナジミダツタト オヂ
イサンハ ヨク イツタ、マタ、イチド ソノ マツガ キラレヨウト シタトキ、オ
ヂイサンハ ソノ マツヲ カバツテ ヤツタ、コノ マツヲ キルト アナタノ ウ
チハ マモナク ツブレマスヨト オヂイサンハ オイシヤサンノ イエニ ワザワザ
イツテ イツタサウダ、ソレデ マツハ キラレズニ スンダ、
オヂイサンハ ツキヨナドニハ、タバコヲ スヒナガラ イツマデモ ソノ マツヲ

ナガメテキタ、

オヂイサンモ コノ ゴロデハ ダイブ ヨハツタ、アル ヒ オイシヤサンノ マツハ ミカワノ クニカラ ハナビノ ツ、ニ マツヲ カヒニ キタ ヒトニ ウラレテ シマツタ、

オホキナ マツハ キラレテ シマツタ、

キヘイヂイサンハ キラレタ マツヲ ナデテ、トウトウ キラレテ シマツタナアト イツタ、ソシテ ホロリト ナミダヲ オトシタ、オホキナ マツハ オホゼイノニンプニ ヒカレテ ムラヲ デテ イツタ、オヂイサンハ ワカレヲ オシンデムラハズレマデ ツイテ イツタ、ソコマデ クルト オヂイサンハ ミナノ シユウマツテ クレ、オレハ モウ コレデ コノ マツト ワカレルダデ イツペン ナデサセテ クレト イツタ、

ソレカラ ミツキホド タツテ ミカワニ オホハナビガ アツタ、オヂイサンハトコノ ナカカラ アガツテ スグ キエル ヨルノ ハナビヲ ミテ キタ、アノハナビノ ツ、ハ アノ マツダロウナ、ト オモヒナガラ、アライ ハナビガ パツト ヒライテ キエテ ユクノト イツシヨニ オヂイサンハ メヲ トヂタ、シンダノダツタ、ミカワノヨウナ トホイ トコロノ ハナビダカラ オトハ キコヘテ コナカツタ、

○鴻の松 『成岩町史』(昭和11年)

鴻の松は板山五軒屋南郊外、字大廻間裏山の谷間にある。俗に御用木といふ。樹幹目通り周十三尺二寸、高五十尺、樹齡六百年と推定され轟々として天を摩し、南は武豊町より北は半田町及阿久比の一部から之を望むことが出来、東衣ヶ浦を航行する船舶は皆此の松を目標としたものである。文久、慶應の頃鴻鳥が来て樹梢に巢を作ったので鴻の松と称んだ。(略) 樹齡尽き昭和七年に枯死して仕舞つた。

◆なぜ、マツ林やはげ山が多かったのか？

・人々が盛んに落葉をかき、下草を刈って、焚き物や堆肥、牛馬の餌に利用したから。

○「里から来た牛車」(昭和5年3月)

里から松葉をたんとのせ、／牛車が町へやって来た。

里から町まで悪い道、／牛車の輪には赤い土。

里からごろごろ来た牛車、／小さい子一人のっている。

里から来た子は町の子の／帽子をほしそに眺めてる。

○「草」(昭和17年5月作)

蜜柑島の上に出ると、大池の堤が見えました。そこに二十人くらいの敵が、手に手に鎌を持っていました。草を刈っていたのです……

「あの、僕たちは、まあ、喧嘩やめた。きょうから、軍隊に献納する草を刈ります。」…

夏休みが終るまで、こちらの子供達と向うの子供達は、仲よく献納の草を刈り、仲よく水浴びしました。向ふは三百二十貫の干草をつくりました。こちらは三百七貫の干草をつくりました。

○「草刈り」（昭和5年7月作）
草刈って／草背負って／帰ります
露もって／かやの葉／重いです。
あの鳥あ／河原に／下りました
これから／夕げに／するのでしょ
草刈って／草背負って／帰ります
お家の／ともしも／見えてます。

○写真 岩滑小学校児童の草刈り

◆近世の森林保護政策

○尾張藩による森林保護 『半田町史』（大正15年）

当時我尾張藩にては藩士水野権平（百四十石を食む）を春日井郡水野村に置き之をして尾張一国の山林を管轄せしめ又鳴海陣屋其他に於ても山林係の役人あり、各地方亦所々に監視者あり、（当地方の監視者は宮津の船橋某なりし）又各村にも山廻りと称し山林を巡視するものあり、山林の私有即ち上納山と称するもの、外は総て官有にして農民は若干の年貢を納めて落葉、下草を採集するに過ぎざりしも、村民は自村の所有山として之を愛護し、若し他村民の入るものあれば之を逐ひ或は捕へて樵具を奪ひ、之を其村の庄屋に送りて訓戒せしむる等其制裁頗る嚴重なりき。

斯の如く官民共に山林の取締を厳にし、保護の方法至らざるなきを以て山林は何れも藜々繁茂し、近きは浜田池、山の田池の附近より午ヶ池附近一帯の如き、何れも巨松蔭生し、鬱蒼たる森林ならざるはなく、彼の半田池附近の如き森林鬱々昼尚暗く、人をして单身旅行を危ましむる程なりし事は、吾人の記憶に新なる所なり。

○「おじいさんのランプ」

藪や松林のうちつづく暗い峠道でも、巳之助はもう恐くはなかった。花のように明かるいランプをさげていたからである。

○保護の違いによる森の呼び方

- ・藩が管理し、決められた期間と場所以外は立ち入りを認めない「御林」
- ・年貢を納める代わりに薪や落葉、下草を採ることを許可する「上納山」（定納山）
- ・ため池への土砂流入を防ぐために厳しく立ち入りを制限した「砂留山」

○現実には抜け穴も……。乱伐されていく知多半島の森 『半田町史』(大正15年)

若し河川、池、沼、道路の堤防、土橋等を架設又は修繕等をなすに、樹木を要するときは之を陣屋に願ひ、山方役人の検査を受けて伐採するの例にして、其所用の樹木假に十本とすれば之を二十本三十本伐採するも、山方役人は苞苴の爲めに之を看過し去れり、此等の流弊漸く行われると同時に盗伐も亦多きを加え……

降て明治八年地租改正と共に山林は総て官林と称し大小林区署の所轄となり、村民は下草落葉等の採集さえも許さざりしが爲めに、村民の山林に対する自愛心全く消失し、啻に他村人を逐わざるのみならず自ら盗伐を行い、盗伐愈々甚だしく未だ数年ならざるに、山林は全く童禿し終に突兀たる状態を現出するに至りしなり。

五 そして現代

◆人々の暮らした川、溜池、森の関わりが希薄になった。

- ・愛知用水開削(昭和36年)と高度経済成長による激変
- ・外来植物がはびこる川堤、つぶされる溜池、薄暗くなる森
- ・「おじいさんのランプ」の半田池も
- ・めっきり少なくなったひよめ(カイツブリ)

◆環境に目を向けることで変わり始める地域

- ・半田市有脇のカイドリ大作戦
- ・矢勝川堤の雑草を刈り払い彼岸花の名所に。そして地域住民が憩える水辺へ。
- ・因縁の岩滑と植を矢勝川が繋いだ。

〈主な参考文献〉

- ・富田啓介 『里山の「人の気配」を追って』(平27・花伝社)
- ・青木美智男 「近世知多半島の「雨池」と村落景観―民話と歴史学の接点から―」(『知多半島の歴史と現在』No.7 平8・日本福祉大学知多半島総合研究所)
- ・青木美智男 「近世尾張国知多郡の「雨池」保安林―「砂留林(山)」の設定と森林景観―」(『知多半島の歴史と現在』No.10 平11・日本福祉大学知多半島総合研究所)
- ・有田和臣 「新美南吉「権狐」と水利権争い―『半田町史』に物語前史をたどる」(『京都語文』第22号 平27・仏教大学国語国文学会)
- ・『半田町史』(大正15年・半田町)
- ・『やなべの歩み』(昭60・岩滑コミュニティ推進協議会)
- ・小栗大造 『歌綴 南吉と岩滑』(平5・私家版)
- ・『校定新美南吉全集』(昭和55〜58・大日本図書)